

<日本イギリス哲学会 第71回関西部会例会 報告要旨>

報告1： 商業社会と女性：ヒュームからトンプソンまで

山尾 忠弘

アダム・スミスは『国富論』の中で商業社会について次のような特徴づけをした。「分業がひとたび完全に確立すると、人が自分自身の労働の生産物によって満たすことのできるものは、かれの欲望のうちのごく小さい部分にすぎなくなる。かれは、自分自身の労働の生産物のうち自分自身の消費を上回る余剰部分を、他人の労働の生産物のうち自分が必要とする部分と交換することによって、自分の欲望の大部分を満たす。このようにして、全員が交換によって生活するようになり、ある意味で商人になる。そして社会そのものも、まさしく商業社会 (a commercial society) とよべるようなものに成長するのである」(Smith 1981 [1776]: 37 訳 I 67)。スミスの後の経済学者は、この「商業社会」という言葉をキーワードにして経済社会分析を進めていったが、この分業と交換を基礎とする新しい社会において、女性がどのように位置付けられてきたのかについては十分に専門的な検討がなされてこなかったように思われる。本報告の問題意識は、この空隙の一部を埋めることにある。報告者の能力の不足から、主として検討される思想家はイギリスの思想家に限られるが、商業社会における女性の地位について18から19世紀の思想家・経済学者がどのように考えたかの一端を明らかにしたいと思う。なお、本報告は報告者が『経済学者たちの女性論』(昭和堂、2024年度刊行予定)と題する書籍に寄稿する一章をもとにしたものであることを付記しておく。

*本報告はJSPS科研費(24K15920)の研究成果の一部である。また研究課題の遂行にあたって慶應義塾大学学事振興基金の援助を受けた。記して感謝申し上げたい。

(大阪経済大学)

報告2：ホッブズの「愚者 fool」への応答

星 太郎

ホッブズは『リヴァイヤサン』15章において、信約の遵守を説く第三自然法を提示している。第三自然法は正義について規定する自然法だが、これに対して「愚者 Fool」は「正義は存在しない」とした上で、「信約の破棄が合理的となることもありうるのではないか」とホッブズに異論を唱えている。本発表は、この愚者の議論を取り上げる。ホッブズは「愚者」に言及し、それに続けて論駁を試みているが、この箇所は長らく論争的なテーマとなってきた。ホッブズは愚者に対して、もしも相手が先に信約を守っているなら、こちらが信約を破棄することは不合理であると反論する。だがそもそも、14章で自然状態における信約の不確かさについて語っていたのもホッブズ自身であり、ホッブズの応答は失敗しているのではないか、という疑義が挟まれてきたのである。ホッブズの応答に問題ありと見なされてきたのは、多くの場合、自然状態に関する規定との矛盾を指摘するものであった。だが、当該箇所の英語版(1651)とラテン語版(1668)の記述の異同をみれば、批判者の想定する自然状態とホッブズの想定との間にはズレがあることが示唆されるように思われる。

本発表は次のような構成を予定している。まず、ホッブズの批判者による想定とホッブズの想定する自然状態の差異を確認する。次に、ホッブズが応答において(1)行為者の視点：信約破棄が合理的だという予見は誤りである、(2)裁定者の視点：信約破棄は一般に非難されるべきである、そして、(3)行為者間の視点：信約破棄を行う者は、他の行為者との関係において排除されるべきである、という三つの観点から応答を行っているを整理し、ホッブズの想定する状況設定においては、特に(3)が重要であることを指摘する。

(京都大学文学研究科)